
ある傭兵の物語

警備兵 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある傭兵の物語

【Nコード】

N5753Q

【作者名】

警備兵 A

【あらすじ】

簡単な仕事の筈だった。場所も、魔物も、危険なものでは無い・・・筈であった。しかし、なんだか知らないが、この日を境に俺の日常は激変してしまい・・・

「ホント、どうしてこうなったんだか・・・」

プロローグ（前書き）

はじめまして、今回初めて小説を書かせていただいた駄目人間です。
色々と駄目な部分もあるでしょうが頑張って書いて逝ければイイナ
ーなんて思ってます。

ではのんびりとどうぞー。

ブローグ

「今日はホント、ついてないなあ・・・」

なんだってこんな事になったんだろうか。

俺はそう思い、本日何回目になるか覚えていないが重々しく「はあ・
・・」とため息を吐く。

幾分どころか、かなりの疲れを滲ませたその息を体内から排出した
ところで、気分はちっとも晴れやしない。

そりゃあ、ただ息を吐いただけで気分が回復するなんて都合の良い
話などありはしないと分かっているが、それでもやはり、自然とた
め息が零れ落ちてしまう。

「グルルルル・・・」

そういや、人間ため息一つすると寿命が何十秒か減ると言われてい
るが、もしそれが当たっていたとすると俺は今日だけで既に10分
く20分程寿命を削ってしまった事になる。

20分と言ったら大体一食分の飯を食う分、装備の手入れの分、エロ本を読む分、下らない雑談をする分、ちよつと一休みする分等々の割とどうでもいいが無視できない行動ができる時間だ。

その時間を無駄に消費している、と考えると俺は案外損な事をしてる様にも思えてきた。うん、今後はため息は禁止にしよう、そうしよう。

あー、早く仕事終わらせて一休みしたいなー。昨日は余り寝れなかったから今日は早く寝たいぜ畜生。

「グアルルルルルルルル」

「・・・はぁ・・・」

かなり現実逃避気味に妄想にふけていた俺だが、禁止にした傍からまたため息が零れる。どうやら目の前の存在は俺の馬鹿な行為を許してくれなかったようで、重厚感のある唸り声を再度上げている。

いい加減色々と諦めがついた俺は、目の前の存在にウンザリとした視線を向ける。

まず目に着くのは一對の、とても力強さを感じる巨大で真っ赤に染まっている翼だ。所々鋭い棘も生えており、触っただけでもスパツと切れそうで痛そうな印象を受ける。

次に見えるのは、とても凶悪そうな人相（？）で、「今すぐ手前を食い干切ったるぜい」とでも言いたげな・・・いや、確実に言っているであろう、とかげ蜥蜴を巨大化&凶暴化させたような頭（顔？）

そして、いかにも堅く防御力が高そうな赤色の竜鱗を、巨大な体（俺の身長を軽く超えている）全体に覆っているその生物は御伽噺や英雄録などに出演して、絶大な知名度を誇っている――

「なんだって、ドラゴン竜種がこんな所に出てくんだよ・・・」

そう、竜である。重量、筋力、魔力、知力、防御力。程度の差があれど、全てにおいて人間とは比べ物にならない程の、桁外れた力を有する、生物達の頂点に君臨する化け物。

それが今俺の目の前で、唾液を垂らしながら舌なめずりしている。まるで美味しそうな獲物を前にした獣のようだ。

・・・獲物とはつまり俺の事なのだが。

ここまで言えば分かるだろう。俺は今。

「こりゃあ・・・今日は厄日通り越して災厄日、だな」

竜・・・ドラゴンに襲われていた。

「ガアアアアアアアアア！！！！」

俺が呟くと同時、竜が合わせたかのように吼える。それだけで大地が震え、他の生き物達が尻尾を巻いて逃げていった。つまり、俺だけ、この竜から逃げ遅れた状態だ。

そして、他の野生動物を追わないという事は、相手は完全に俺を獲物と認識してみたんだ。事実、もう目がヤバイ感じになって俺を睨んでいる。正直泣きたい気分です。

が、んなことしてたら、ただ喰われるだけなので・・・仕方なく、俺は背中に携帯していた愛用の大剣（それなりに良質な鉄合金で出来た、かなりの重量がある両手剣。ちなみに片刃）を引き抜き、体は横向きにのまゝ、大剣を竜に向け下段に構えた。

とまあ・・・格好だけ武器を構えてみたものの、ぶっちゃけ勝てる見込みゼロに近いです。

そりゃそうだ。俺にゃあ御伽噺に出てくる英雄や勇者のような伝説

的な力はない。この武器も、重さこそあれど、竜鱗をバターの様に切り裂く伝説の魔剣のような悪魔的切れ味なんてもんに一光年離れた位置の切れ味しかない。

つまり俺は、正真正銘、多少筋力が高いだけで、普通の戦士で傭兵だ。そんなが、竜種に勝てる訳が無い。

かといって、他の野生動物みたく尻尾を巻いて逃げる事も、竜相手じゃあそつとう難しい。

なんせ相手はあの巨体で普通の鳥よりも遙かに速く飛べるのだ。物理法則をガン無視しているとしか言い様がないが、事実そうなのでしょうがない。

更に酷いのが、ここら一帯岩も木も何も無い平地であり、隠れられるスペースが皆無である事だ。おかげでどうやってもガチなタイムン勝負をしなければならない。

なので必然的に俺が取れる行動と結末は限られてくる。それはすなわち

戦うか／戦わないか

勝つか／負けるか

殺すか／死ぬか

喰うか／喰われるか

となる。

まったく持つて、嫌になるくらいシンプルで分かりやすくて恐ろしい自然の摂理だ。^{ルール}

「まったく・・・本当、なんでこうなったんだか」

最後にひとつ。疑問、というより愚痴を零して、眼前に迫ってきた「死」に抵抗しようと大剣を力強く握りなおし、死神（竜）を睨み付けた――

プロローグ（後書き）

ため息に始まりため息に終わる。そんな話です（マテ

なんでこうなったかは次の話で書く予定です）w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753q/>

ある傭兵の物語

2011年10月10日01時01分発行